

## シューマンの夕べ

### 歌 詞 大 意

自由な心 Freisinn  
作品 25-2 詩:ゲーテ

ぼくが鞍にまたがるのを許してくれ！  
おまえたちは小屋やテントの中にいるがいい  
ぼくは楽しく遠くまで旅をし  
頭上には星があるだけ

神は星達をいつも  
陸と海の案内人として  
それで君たちが喜ぶように  
空高くちりばめた

歌曲 (2) Lieder  
作品 25-6 詩:ゲーテ

僕の前に置くな 無礼者め  
鼻先に酒壺を  
僕にワインを運ぶ者よ 愛想良くしろ  
さもないと杯の酒も濁ってしまうぞ

愛らしい童よ 入ってこい  
なぜ入り口に立っているんだ  
おまえも将来お酒をつぐんだ  
酒はすべて美味く澄んでいる

はすの花 Die Lotosblume  
作品 25-7 詩:ハイネ

はすの花は  
陽の光におびえたように  
おもてを伏せて  
夜を待っている

愛しい月は  
彼の光で花をてらす  
そして可憐なはすの花は  
やさしい姿を見せるのです

はすは頬を染めながら  
天をじっと見つめ  
切ない恋に 香りを漂わせ  
なきながら ふるえている

二人の擲弾兵 Die beiden Grenadiere  
作品 49-1 詩:ハイネ

ロシアで捕虜となっていた  
二人の擲弾兵がフランスへ向かった  
そして彼らがドイツ陣営に入った時  
二人とも頭を垂れていた

そこで彼らは悲しい知らせを聞いた  
フランスは戦争に負けて  
その大軍は撃破されて  
皇帝が捕われの身となったことを

その悲しい知らせに  
二人の擲弾兵は一緒に泣いた  
一人が言った「ああ、悲しい  
古い傷が疼くようだ」

歌曲 (1) Lieder  
作品 25-5 詩:ゲーテ

ひとりであることほど  
いいことはあるだろうか  
ひとりでワインを飲む  
だれにも邪魔されずに  
自分の考えに浸る

もう一人が言った「全ては終わった  
僕も君と共に死にたい  
しかし故郷に残してきた妻と息子は  
僕がいないと生きて行けない」

「妻がなんだ、子供がなんだ  
僕はもっとまじな望みを持っている  
彼らが餓えたら 物ごいをさせる  
僕の皇帝が 皇帝が捕らえられたんだぞ

友よ 頼みがひとつある  
もし今僕が死んだら  
屍をフランスまで連れて行って  
フランスの土に葬ってくれ

赤い綬のついた十字勲章を  
僕の胸につけてくれ  
銃を僕の手を持たせてくれ  
そして剣も腰につけてくれ

僕は墓に横たわり  
歩哨のように静かに見張ろう  
大砲の轟く音が そして  
馬の足掻き嘶く声が聞こえるまで

すると皇帝が僕の墓の上を進み  
剣が音を立てて光り輝くだろう  
その時こそ僕は墓から武器を持って出てくる  
皇帝をお守りするために！」

僕の愛は輝き渡る Es leuchtet meine Seele  
作品 127-3 詩:ハイネ

僕の愛は暗く  
華やかな色の中に輝き渡る  
夏の世に語られる  
お伽話のように悲しく 暗く

「魔法の庭の中を二人の恋人が  
黙ったままひっそり歩いていく  
小夜鳥が囁き  
月の光が輝いている」

「乙女は絵のようにじっとたたずんでいた  
騎士が彼女の前にひざまずいている  
そこに野蛮の国の巨人がやって来て  
乙女はおののき逃げ出した」

「騎士は血を流して 地に倒れこみ  
巨人もつまずき逃げ帰る」  
僕が墓に入るとき  
このお伽話も終わりを告げる

「リーダークライス」 Liederkreis  
作品 39 詩:アイヒェンドルフ

1. 異郷にて In der Fremde

赤い稲妻の彼方の故郷から  
雲が漂ってくる  
しかし母や父はずっと昔に死んでしまっていて  
僕を知るものさえない

なんと早く静かな時がやってくるのだろう  
そこで僕は憩いの時を感じる その上で  
美しい森の孤独はさやいでいる  
でも僕を知るものはここにもいない

2. 間奏曲 Intermezzo

貴女の安らかな面影を  
僕の心の奥にしまおう  
それは爽やかで楽しく  
いつも僕を見つめている

僕の心は密やかに  
昔の美しい歌を歌っている  
それは空に舞い上がり  
君の許に飛んでいく

3. 森の対話 Waldesgespräch

「夜も更けて寒くなったのに  
何故一人でこの深い森に行くのか  
美しい花嫁よ  
僕が送って行ってあげよう」

「男はみな悪巧みをしてばかり  
私の心は痛みで張り裂けてしまいました  
角笛が あちこちで響き惑わせているわ  
お逃げなさい 貴方は私が誰だか知らないのね」

「馬も女もこんなに立派に飾られて  
乙女は若くて美しいし  
わ 判ったぞ 神様お助けを！  
お前はあの魔法のローレイだな！」

「どうやら判ったようだね あの高い岩山の

私の城から静かにラインを見ていたの  
夜もすでに更けて寒くなってきたわ でも  
貴方はもうこの森から出ることはできないわ」

4. 静寂 Die Stille

僕がどんなに幸せか  
誰も知りっこないし 思ふやつもない  
ああ ただ一人さえ気づいてくれさえすれば  
ほかの誰にも知られてならない

外は雪にうもれて静かで  
黙り込んで隠されていて  
僕の思いのように  
夜空の星は黙ってはいはいない

できることならば 小鳥になりたい  
海原をわたって  
遙か海の彼方まで飛んで行って  
天まで昇りたい

5. 月の夜 Mondnacht

それは空が大地に静かに  
接吻をしているようで  
仄かな花の香りの中で  
夢を見ているようだった

そよ風は野原をわたり  
穂が緩やかに揺れていた  
森は密かにさやぎ  
星の綺麗な夜だった

僕の魂は  
大きく翼を広げ  
故郷をめざすが如く  
静かな大地を越えていった

6. 美しい異郷 Schöne Fremde

梢はざわめき震えている  
崩れかけた城壁のまわりを  
古代の神々がこの今

巡回をしているように

黄昏の輝きのなか  
ミルテの木立の向こうで  
夢の中で何かを語りかけてくるように  
彼方が酔ったように語っている

どの星も僕に  
燃えるような眼差しを投げかける  
未来の大きな幸せを語るように  
彼方をうっとり語っている

7. ある城で Auf einer Burg

丘の上で老騎士が  
眠りながら見張りをしている  
俄雨がとおり過ぎ  
森は格子越しにざわめいている

髭と髪はのび  
胸と襟飾りは石と化し  
彼は何百年もの間  
城の静かな居間に座っていた

外はひっそりと静まりかえり  
人々は谷を下りていく  
森の鳥たちが  
寂しく窓辺で歌っている

婚礼の船が陽の中のラインを下っていき  
音楽は陽気に流れている  
そして美しい花嫁は  
そっと涙を浮かべている

8. 異郷にて In der Fremde

森のあちこちから  
小川のせせらぎが聞こえてくる  
森の中で梢がざわめく中 何処にいるのか  
自分でも判らなくなってしまう

このしじまの中で  
小夜鳥が啼いている  
昔の良き日を

何かを語るかのように

月の仄かな光が漂い  
眼下の谷に城があるように  
映してくれるけれど  
それは遙か彼方にある

赤や白のバラに包まれた庭で  
愛しい人が  
僕を待っている気がする  
その人はもうこの世にはいない

9. 憂愁 Wehmut

時折 僕はさも楽しげに歌う  
さも楽しげに  
本当は涙がひそかにこみ上げてくる  
すると いつしか心は楽になる

春のそよ風はたわむれ  
小夜鳥は籠の中から  
憧憬の歌をあたりに響かせている

人々の心は高鳴り  
喜びにつつまれる  
しかし一人としてその歌の苦しみや  
深い悲しみの響きを知るものはいない

10. 薄明 Zwielficht

黄昏はその翼を今にも広げようとしていて  
木々は恐ろしいばかりにざわめき  
雲は重苦しい夢の如く垂れこめている  
この恐ろしさの意味は何だろうか

お前が一頭ののろ鹿を他の誰よりも愛するなら  
勝手に草を喰わせておいては駄目だ  
獵師が森を徘徊して角笛を吹いている  
人の話し声があちこちでしているじゃないか

お前に友達がいるなら  
こんなときには信じるな  
眼差しや口許では親しげにしているも  
偽りの平和の中で企みをめぐらしている

今日は疲れ果てて滅びるも  
次の朝には新しく生まれ変わるもの  
多くのものは夜のうちに失われていく  
用心しろ 眠らずに見張っている

11. 森にて Im Walde

婚礼の行列が山沿いに進んでいた  
鳥たちの歌声が聞こえていた  
そこに大勢の馬に乗った人が現れ  
角笛の音が響いた それは楽しい狩りだった

あっという間に全ては消え去り  
夜があたり一面を覆い尽くしていた  
山の方から森がざわめきたち  
僕は心の底からおののいていた

12. 春の夜 Frühlingsnacht

庭の上空を  
渡り鳥たちが飛び行くのを聴いた  
それは春の訪れだった  
地上ではもはや花が咲き始めている

はしゃぎたいような 泣きたいような  
僕には言い現しようのない  
昔の奇跡が  
月の輝きと共にふたたび差し込んでくる

月や星がそのことを語り  
森が夢の中で同じように囁く  
小夜鳥は告げる  
「彼女は君のもの！」

「詩人の恋」 Dichterliebe  
作品 48 (1840 年) 詩:ハイネ

1. 美しい五月に

Im wunderschöne Monat Mai

美しい五月に  
すべての蕾が開きはじめるとき  
僕の心の中に  
この恋が芽生えた

素晴らしく美しい五月に  
すべての鳥たちが歌いはじめるとき  
僕は彼女に  
僕の想いを打ち明けた

2. 僕の涙から

Aus meine Tränen sprissen

僕の涙からたくさんの花が咲きいでた  
たくさんの花が  
そして僕のため息は  
小夜鳥の合唱となった

そして君が僕を愛してくれるなら  
僕はこの花をすべて君にあげよう  
そしてきみの部屋の窓辺で  
小夜鳥の歌を響かせよう

3. バラを ユリを 鳩を 太陽を

Die Rose die Lilie die Taube

バラを ユリを 鳩を 太陽を  
それらを僕はかつては夢中で愛していた  
僕はもうそれらではなく  
僕はたった一つのを

小さな、素敵な、清らかな  
ただ一人を愛する  
彼女こそすべての愛の喜び  
バラであり ユリであり 鳩であり 太陽である

4. きみの瞳をみると

Wenn ich in deine Augen sehe

きみの瞳をみると  
すべて僕の悩みも苦しみ消えてしまう  
しかし僕がきみにくちづけをすると  
僕はすっかり元気になる  
僕がきみの胸元にもたれるならば  
天国の喜びがこみ上げてくる  
もしきみが「あなたが好きよ！」というなら  
僕は激しく泣かずにいられない

5. 僕のこころを沈めよう

Ich will meine Seele tauchen

僕のこころを  
ユリの杯の中に沈めよう  
ユリは僕の恋する人の歌を  
そっと響かせるだろう

その歌はふるえ そしておののこう  
まるで彼女がかつて僕にしてくれた  
口づけのように  
とても甘いひとときだった

6. ラインの聖なる流れ

Im Rhein, im heiligen Strohme

ラインの聖なる流れの波間に  
その堂々とした大聖堂と  
聖なる都市ケルンが  
その姿を写している

その大聖堂の中に  
金色の羊皮紙に描かれた一枚の絵がある  
僕のすさんだ人生の中で  
その絵はやさしい光を投げかけていた

花と天使が  
聖母のまわりを囲んでいる  
その瞳 その口元 その頬  
僕の愛する人のとまったく同じものだ

7. 僕は恨まない Ich grolle nicht

僕は恨まない たとえ心が張り裂けようとも  
永遠に失った恋人よ！僕は恨まない  
たとえ君がダイヤモンドの輝きを放ったとしても  
君の心の闇夜の中には光は差し込まない  
それはわかっていたことだ

僕は恨まない たとえ心が張り裂けようとも  
僕は夢の中で君を見た  
そして君の心の中の闇夜を見たのだった  
そして君の心に噛みつく蛇を見た  
僕は僕の恋しい人を見た 君の哀れな姿を  
僕は恨まない

8. そして花が 小さな花がわかってくれるなら  
Und wüßten's die Blumen, die Keinen

そして花が 小さな花がわかってくれるなら  
どれほど僕の心が深く傷ついているか  
きっと君は僕と一緒に泣いてくれるだろう  
僕の苦しみを癒すために

そして小夜鳥たちがわかってくれるなら  
どんなに僕が悲しく そして病んでいるかを  
すると楽しそうに 僕を元気付けてくれる歌を  
歌ってくれるだろう

そして僕の悲しみを  
あの金色に輝く星たちがわかってくれるなら  
彼らはあの高いところから降りてきて  
慰めの言葉を僕に囁くであろう

だれもがそれを知るよしはない  
ただひとりだけが僕の苦しみを知っている  
彼女こそが僕の心を  
引き裂いてしまった人だから

9. あれはフルートとヴァイオリン  
Das ist ein Flöten und Geogen

あれはフルートとヴァイオリン  
トランペットも響きわたっている  
あそこで僕の愛しいあの人が  
婚礼の踊りを踊っているのである  
あれはティンパニの轟き  
シャルマイの響き  
その音に混じって愛らしい天使が  
すすり泣き 呻き声をあげている

10. あの歌がきこえてくると  
Hör' ich das Liedchen klingen

あの歌声がきこえてくると  
かつて愛しい人がうたっていた歌が  
すると僕の胸はやるせない痛みで  
張り裂けそうになる

おぼろげな思いが僕を  
森の中の丘の上に駆り立てる  
そこで僕の耐え切れぬ心の痛みは  
涙の中に溶けてしまう

11. 若者がある娘を愛した  
Ein Jungling liebt ein Mädchen

若者がある娘を愛した  
その娘は他の若者を選び  
その者はまた他の娘を愛して  
この娘と結婚してしまった

その娘は腹立ちまぎれに  
初めに眼に入った  
ゆきずりの男と一緒にあった  
初めの若者は嘆いた

これは昔の話  
しかしこれはいつまでも繰り返されている  
そして、そういう目にあつたものは  
心の張り裂ける思いをするものだ

12. 輝ける夏の朝に

Am luechtenden Sommermorgen

輝ける夏の朝に

僕は庭を歩いていた

花たちは ひそひそと話しをしている

僕は黙って歩いていった

花たちは ひそひそと話をしていたが

僕を同情をするように見上げて語りかけた

「私達の姉を悪く思わないでね

かわいそうな青ざめた顔のお方！」と

13. 僕は夢の中で泣いていた

Ich hab' im Traum geweinet

僕は夢の中で泣いていた

君が墓の中にいる夢を見たから

僕は目を覚ました

しかし涙はまだ頬をつたって流れていた

僕は夢の中で泣いていた

君が僕から去って行く夢を見たから

僕は目を覚ました

しかし僕はまだしばらく激しく泣いていた

僕は夢の中で泣いていた

君がまだ僕を愛している夢を見たから

僕は目を覚ました しかし今もなお

僕の涙が頬をつたわって流れてくる

14. 僕は夜ごと君の夢を見る

Allnächtlich im Traume

僕は夜ごと君の夢を見る

君がやさしく挨拶してくれるのを見る

そして僕は 君のやさしい足元に

大声で 泣き崩れた

君は僕を悲しげに見つめ

ブロンドの頭を振る

真珠のような涙の滴が

君の瞳からこぼれ落ちた

君は僕にそっと小声で言葉をかけ

いとすぎの束をくれた

僕が目覚めると

いとすぎは消え

あの言葉も忘れてしまっていた

15. 昔のおとぎ話の中から

Aus alten Märchen

昔のおとぎ話の中から

白い手で手招きをする

不思議の国から

歌声や調べが響いてくる

そこでは 色とりどりの花が

夕日の黄金の光を浴びて咲いている

花嫁のような顔で

芳しい香を放つ

緑の木々は

太古の歌を歌っている

そよ風はさわやかに響き

鳥たちは高らかに歌う

そして 霧はゆらめきながら

大地より立ちのぼり

美しい合唱の歌声に

軽快に踊りまわる

どの葉からも そして枝からも

青い火花が散っているし

そして赤い光が入り乱れながら

走り回っている

天然の大理石の中からは

噴水が音高にほとばしって

小川の中には妖しい光を

映しながら流れている

ああ、僕がその国の中に入ることができたなら

僕の心は喜ぶであろうに

そして全ての苦しみを解き放ち

そして自由で幸せになれる！

ああ！ 至福の国なら  
僕はよく夢の中を見る  
しかし朝の太陽が昇ってくると  
それは泡のようにはかなく消えてしまう

16. 昔のいまわしい歌

Die alten bösen Lieder

昔のいまわしい歌  
いやな悪い夢  
今こそ葬ってしまおう  
大きな棺桶を持って来い

その中に僕はたくさんの物を入れよう  
しかしそれが何かまだ言わないでおこう  
その棺桶はもっと大きくなければならない  
ハイデルベルクの橋よりもだ

そして棺台をもってこい  
頑丈で分厚い板を  
その棺台はマインツの橋より  
もっと長いものでなくちゃいけない

そして12人の大男連れて来い  
それはライン河畔ケルンの大聖堂の  
力持ちのクリストフよりも  
もっと強くなければならない

彼らに棺桶を担がせ  
海の中に沈めよう  
こんなに大きい棺桶は  
大きな墓場がちょうどいい

わかるかい どうしてお棺が  
そんなに重くて大きいわけを？  
僕が僕の愛と そして僕の苦しみを  
いっしょに葬ってしまったからなのだ

(訳:河野克典)